

上級医の頭の中が言語化された、研修医のバイブル 京都 ER ポケットブック

洛和会音羽病院 救命救急センター・京都 ER ● 編
宮前伸啓 ● 責任編集
荒 隆紀 ● 執筆

〔評者〕池上徹則(倉敷中央病院救急救命センター救急科主任部長)

本書は洛和会音羽病院救命救急センター・京都 ER で「バイブル」とされてきた院内向けマニュアルを書籍化したものです。臨床教育病院の雄として名をはせる音羽病院由来のものだけあり、随所に秀逸なエッセンスが詰め込まれています。

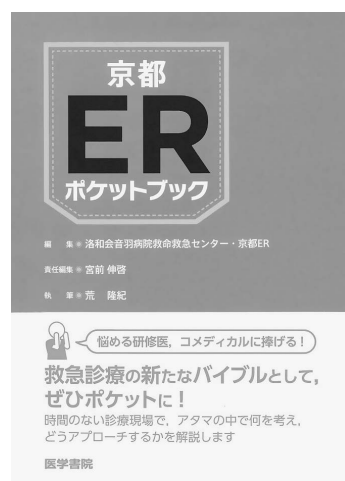
まずは冒頭数十ページの「原則編」にお目通しください。多くの医師にとって ER という特殊な環境と特別な時間軸の中で診療することは容易ではなく、またその特殊性を研修医の先生方に伝えることも困難ですが、ここでは患者さんの臨床像の変化に対する時間経過とその考え方、救急外来での診療の流れにおける時間とその考え方が非常に明快に記述されています。そして、これら「時間」についての考え方は、以下「検査編」を経て「トリアージで考える 主訴別アプローチ編」では、さらに緊急度を付与して整理されるなど、本書を通して幹のように貫かれています。

また、勤務先が変わった時など

にしばしば経験することですが、従来の自身の診療スタンスと、変わった先の医療機関で目の前の患者さんに対峙する際の診療およびその結果における微妙なずれを「自分の置かれた病院のセッティングにも注目すべきである」と説明されている箇所など、多くの臨床医の納得するところでしょう。著者らは「上級医の頭の中を言語化する」ことを目標として執筆に臨んだと記されていますが、その試みの成功が見て取れます。

加えて、総論的に書かれた書籍を忙しい救急外来で有効に使うには索引の充実度が重要になりますが、ここにも十分な配慮がなされ、例えばサ行に「死の下痢」、ハ行に「昼ドラ」など、一見すると「えっ？」というようなキーワードまで盛り込まれています。

「ああ、もう当直の時間がやってくる……」と憂鬱な気持ちで救急外来に向かった経験が執筆の動機であったと、著者の荒隆紀先生は「あとがき」に記されていますが、今日も同じような気持ちでト



ボトボと救急外来に向かう全国の研修医の先生方のみならず、そんな彼らを指導する立場の先生方にも、お勧めします。

A6・頁 416

2018 年 6 月

定価：本体 3,500 円＋税

[ISBN978-4-260-03454-8]

医学書院 刊